生涯学習情報誌

フォンズ

第 57 号
2011年 9 月25日
発　行
常陸太田市フォンズ・ネットワーク
事務局　常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061
茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL 0294(72)8888
FAX 0294(72)8880

小菅町（冷水場）

水の想い出 ㊻

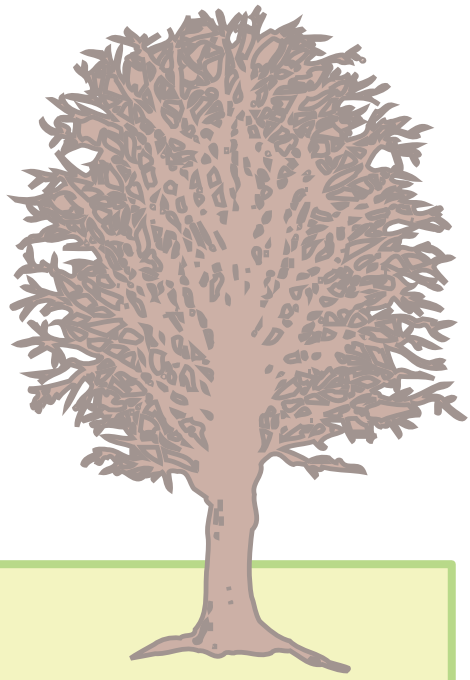
常陸太田市の山あいを舞台にクリスト・アンブレラ展が開催されてから20年になります。1991年10月9日午前7時を合図に八角形の青い傘が開きました。高さ6m直径8.69m。里野宮から旧里美村の陣場まで、1340本の傘が立ち、開催中の道路渋滞はひどいもので、もっぱら自転車や歩きでカメラを持ち出かけました。丘の上にぽつんと1本だけ立っているものもあれば、川の中に行列を作っているものもある。太陽の光のあたり具合で傘の表面が美しい銀色に輝くものもありました。当時は水量も今よりずっと多く、膝くらいまで水に浸りながらシャッターを切ったものでした。10月の水はとても冷たかったように覚えています。カメラマンも大勢来ていて、人のいない風景を写すために早朝から出かけたりしましたが、今思えばカメラマンの行列もおもしろいアングルとして写しておけば良かった、などと思うこともあります。

20年近くも過ぎ、アルバムに収めた写真を見ながら、あの日あの時が思い浮かばれる、そんなある日。アンブレラ展のクリストさん本人にお会いすることができました。昨年の2月、ひょんなつながりから、当時の傘のあった場所を案内する役目をいただいたのです。クリストさんは立ち並んだ傘の場所ひとつひとつ記憶にあるようでした。また、陣場ではスタッフたちと寝泊まりした家も指さして示すほどでした。今は移転してしまった沿道のラーメン屋さんに寄っていこうと言うので、通訳さんに聞いて見るとラーメンが好きで随分通ったのだそうです。とても気さくな人柄でした。

アンブレラ展のあった秋と案内した2月、季節の違いはあっても「昔と変わらない、来て良かった」とクリストさんは言ってくれました。自分も故郷の景色に改めて共感を覚えました。　（石川　文男）

フォンズとは、ラテン語で泉の意味です。とぎれることなく新鮮な情報がお届けできるようにと名付けられました。

常陸太田の巨樹すぺしゃる

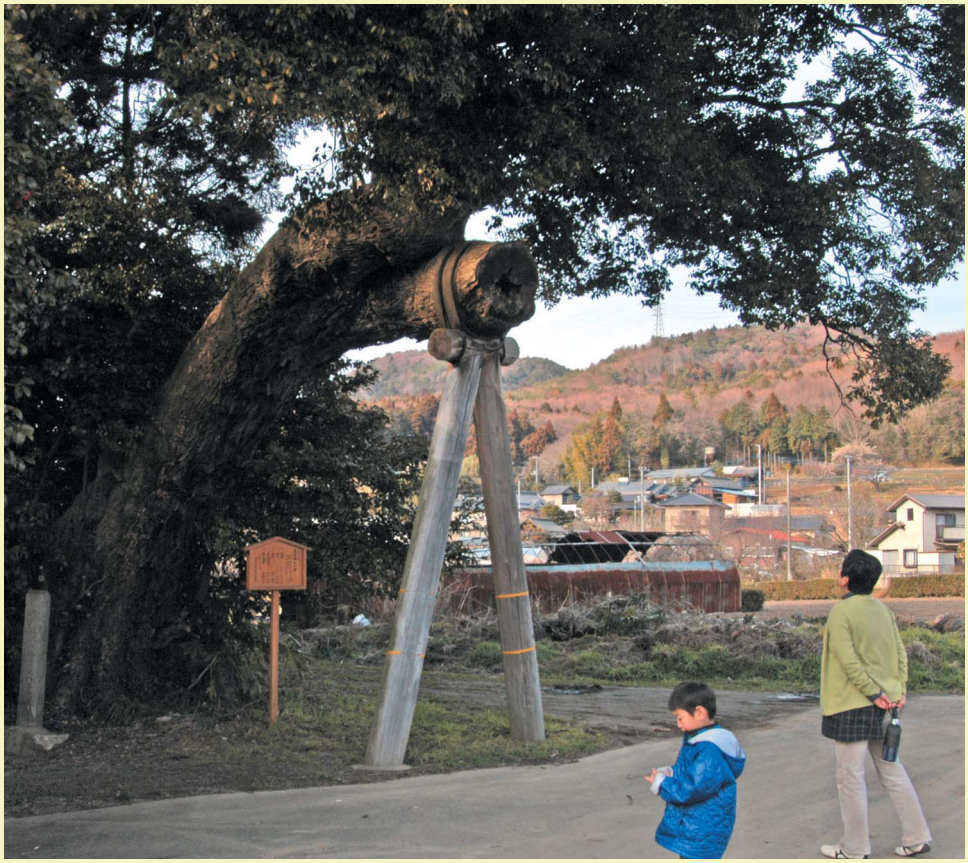


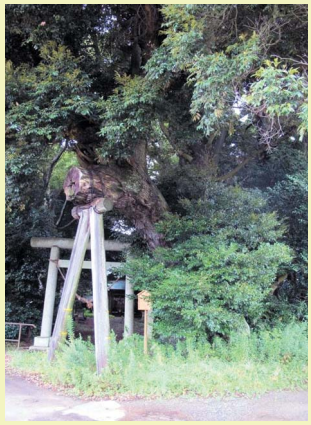
10月29日・30日の両日、常陸太田市で「巨木を語ろう 全国フォーラム」が開催されます。樹木はその姿の中に、育った風土を内包し、巨樹は悠久の時の流れさえ感じさせます。フォンズで連載してきた「人に愛されたたくさんの樹木の物語」を特集でお届けします。

鹿島神社の椎

瀬谷郷瀬谷村（現在の大森町山根）に源頼朝公が瀬谷郷の地を鹿島神宮へ寄進し、瀬谷権禰宣（ごんねぎ）が来て神勤し、立派な社殿を造営したと云う瀬谷鹿島神社がある。その神社鳥居の入り口にある椎の木（スダジイ）は市指定天然記念物に指定され根回り11.8m、推定樹齢440年以上の巨樹である。私が幼少の頃その木は双幹で一方の幹が朽ちて腐り洞穴になっていた。境内で「かくれんぼ」をした時、この洞穴の中によく隠れて遊んでいた。椎の実が多くなっており、拾って鉄板で焼いて食べた。香ばしくて美味しかった。また、この大きな椎の木は横枝が出ていて、その枝の上で寝そべっていたり、その横枝にぶら下がり飛び降りたりした記憶が甦る。現在、その横枝は切り取られ木の倒れ防止の支柱となっている。

（高橋　靖浩）





香仙寺のシイ

松栄町香仙寺の隣に住む80年間シイの木を見てきた地元の方からお話を伺いました。子どもの頃は、まわりにケヤキの大木やヤマザクラがあり、うっそうとした中に今の5倍くらいの枝ぶりのシイの木があった。小さい子どもたちはその森の中で遊んだりしていたが、神々しいシイの木には誰ひとり登ろうとはしなかった。シイの実を食べたり、シイの実でお手玉を作って遊んだりした思い出がある。

戦争中、艦砲射撃があった頃、近所で大きな音がした。爆弾が落ちたかと家族で心配したが、外にでてみると、隣のシイの木の大枝が落ちた音だった。二人で抱えきれない程の大枝であった。

（鴨志田　悟）

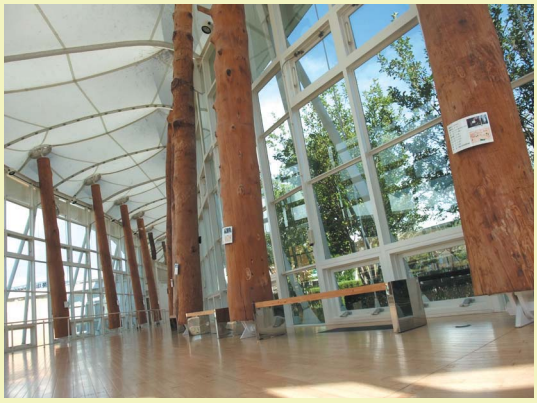
近くの駐車場にある枝の残骸

丸太の樹齢は合わせて一万二千百歳

空から見ると建物がCO_2の文字の形に見える常陸太田市総合福祉会館（地球温暖化防止活動大臣賞、JIA環境建築賞の受賞）で会館に詳しい加瀬さんにお話を伺いました。

回廊の柱に使用された樹木は市内より伐採した丸太152本。樹齢は、推定35年から150年。種類は、ケヤキ、クロマツ、アカマツ、クルミ、ナラ、イチョウ、シラカシ、ニセアカシア、キハダなど19種です。丸太には、それぞれプレートが付いています。プレートには、育った場所の地図や伐採する前の写真、種類、樹齢、長さ、重さ、太さが記されています。こんなに多くの木を市内から集めて建てられたかと思うと、市内の木の豊かさを実感します。樹齢や木の太さは種類によって違い、色や質感を感じることができ、樹木の標本のようです。この建物は建築家、石井和紘氏が設計したものです。伐採したところには、同じ種類の木を植え、会館の庭には切った本数と同じ152本の木を植えたそうです。石井氏は、「二酸化炭素の排出削減のために木材をもっと使おう」と提案しています。丸太は炭素の集まりなので燃やさず建築に使えばその分だけCO_2を固定することができるそうです。この会館だけで500tCO_2を固定したことになるそうです。

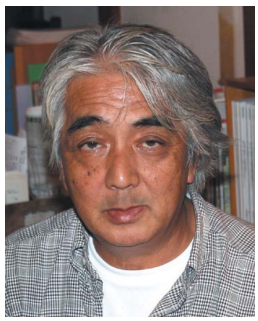
（相原　早苗）



会館内部

柱についているプレート

樹木を撮り続けて…



茨城新聞社　写真部
井上（いのうえ） 伸二良（しんじろう）さん

樹木にまつわるエピソードを探している時、「樹木の写真なら、この人にお願いするといい」と頼りにされる人がいると聞きお話を伺ってきました。その方は常陸太田市のご出身、県内をくまなく撮影している茨城新聞社のカメラマンでした。

■旧水府村のご出身？

旧水府村下高倉の出身です。高校は大子にすすみましたが、それまでは水府で過ごしました。2年前に茨城新聞社を定年になり、嘱託として今も県内各地を撮影しています。仕事で県内を回ることが多いですが、取材の合間の時間を利用して書きためたものが約2年間毎週掲載されていた「ふるさとの樹木・古木」です。

ふるさとの巨樹・古木

若宮八幡宮の大ケヤキ（常陸太田市）

幹回り10メートル超の風格

常陸太田市中心部の高台に鎮座する若宮八幡宮。源氏川沿いの街並みが見渡せる境内には、ケヤキやスギの巨木が立ち並ぶ。

中でも一番太いのが、鳥居近くにある大ケヤキ。樹高約三十メートル、幹の周囲も十メートルを超え、推定樹齢は六百四十年。力強く枝を張り、堂々とした姿で参拝者を迎えてきた。

十年ほど前に樹勢回復の手当てが実施され、枝の近くには、空洞を補った作業の跡が見られる。二〇〇四年の夏には台風で幹の上部が折れたというが、見事な

参道横にそびえるケヤキ＝常陸太田市若本町

茨城新聞2006年５月25日版

第1回は大子の外大野のシダレザクラ、自分が育った地域の慣れ親しんだ樹木から紹介していった記憶があります。若宮八幡宮の大ケヤキは、あれだけの巨木があれだけの本数あるのは県内でも珍しい。木立の中に入ると、空気感が違いますね。印象に残っているのは真弓の爺杉、2回訪ねました。当時看板もなにもなく、人が近づくことを避けていた雰囲気がありました。1回目は地元の人にご案内いただきましたが、2回目は一人で訪ねました。多くの樹木の写真は高さや太さの比較のため人物と一緒に撮ることが多いのですが、真弓の爺杉もそのように撮ってみたくても、待てど暮らせど人など来ない場所でしたね。

■樹木の撮影～地域の背景も写せる

人のようにものをいわないので、まわりをじっくり観察し、どこから眺めるといいのか、どの枝振りがいいのか探すことが第一歩。例えば日立市の御岩神社の杉木立のように、杉木立というとまっすぐ並んだイメージがあります。でも、水府の太郎杉は自然杉に近い。樹木のある地の環境なのか、枝振りが素晴らしい。写真に写すにはその土地の特徴を見つけ出すことが大事です。印象に残っているのは、杉の大きさといい、樹勢もいい常陸大宮の三浦の大杉。立派な樹木だが人の手が入っていない。下枝も取ってなく、自然のまま、野性味を併せ持った魅力のある木です。写真を写すとき一番大切なのはカメラの向こうに広がる風景の美しさや感動など、感じたことを「家族、妻や子どもたちにどうしても見せたいという思い」だと思います。

■現在取り組んでいるシリーズは

平成の合併が取りざたされてきた時、合併がすすむ前にやらなくてはと思ったものの一つが、このマンホールの撮影です。マンホールには市町村名がかならず入り、他に市の花等が入っています。それが合併に伴い失われる可能性を思いました。実際は市町村の合併とはまた別もので、なかなか統合が進まず今も残っていますね。

路上の百景 40

震災の爪痕

（常陸太田市）

市の西部、旧金砂郷町玉造地区。水利に恵まれ、山裾から緑の水田が広がる。

豊かな実りを予想させるいつもの夏景色の中、4カ月前の大地震を物語る想定外の光景がそのまま残っている。強い揺れは、道路沿いの下水道施設を大きく地上に持ち上げた。

旧町時代の鳥、木がデザインされたマンホールのふた

約100戸にわたり、5、6個のマンホールが地上から約1メートルほど上昇。歩道も陥没やひび割れの惨状を残している。

同地区の下水道のふたは旧町時代のシンボル、ウグイス、ウメをデザイン。定位置から大きく飛び出したマンホールふたが悲しそうに見えた。

（写真と文、井上伸二良）

大地震の爪痕が残る下水道

茨城新聞2011年７月23日版

■大きな木は環境の良くない所に立っている

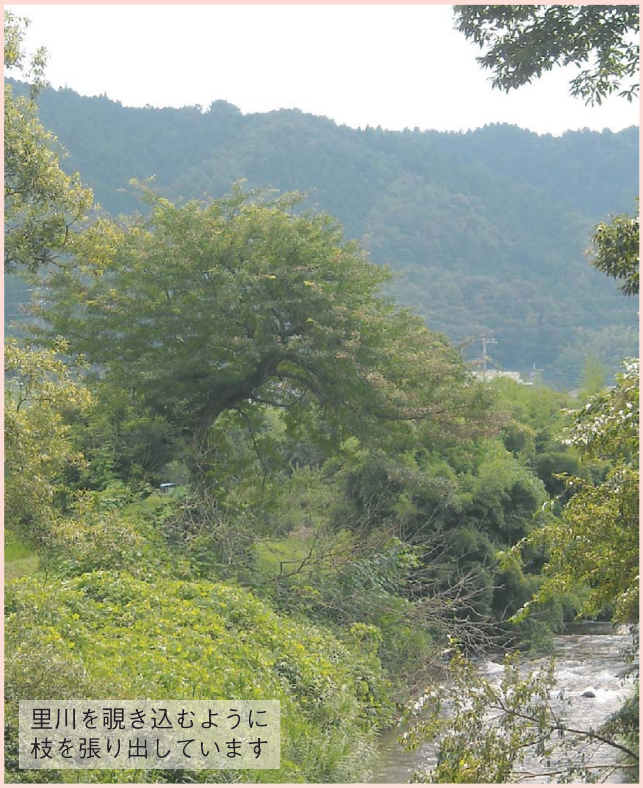
長く撮影していると気づきますが、この20年で県内の松の銘木はほとんど枯れてしまいました。高萩市にあった陸前浜街道の松林も昨年最後の1本が枯れてしまいました。松は地名に読み込まれるなど昔から大事にされた木でした。その松がほとんどなくなってしまうということは、時代や環境の変化を表しているのではと思います。

もう10年以上前、木のことならこの方に聞くといいと、ひたち巨樹の会の会長・川上千尋さんのことを知り、何度かお邪魔して基本的なことを教えていただきました。川上さんにうかがった中で「大きな木というのは、斜面とか痩せた土地とか、環境のあまり良くない所に生えている。斜面などの環境の良くない地では樹木も常に緊張感を持っている、そういう場所では木は根をしっかりと張り、根付いているから。」という言葉が今も心に残っています。若宮八幡宮のケヤキもあの狭い土地で、すぐ横が斜面になっています。あのような狭い場所には根をしっかりと張らないと大きく育たないでしょう。人のあり方にも通じるものがあると思います。

（塩原　慶子）

流れ流れて里川の岸に根付いて幾百年

大中町里川べりのサイカチ


里川を覗き込むように
枝を張り出しています

市役所里美支所から南、和見（わみ）の集落へ向かう農免道路を行くと里川にかかる橋があります。橋の上から下流側をみると、川岸に覆い被さるような太い枝を張り出した大木があります。

巨樹の名前はサイカチ。マメ科の落葉樹で秋には30cmもあるサヤをつけた実がなります。果実はサポニンを含んでいるので、昔はムクロジやエゴノキ同様、代用石鹸に使われていたようです。

樹木の管理者のご子息の話によると、祖父の幼いころより大木であったと聞いていたそうで、言い伝えによると里川上流より流れてきた種子がこの地に留まり、今の姿になったとのことでした。

巨樹や古木といわれるものは、人々に畏怖されつつ守られ時を刻んできたもの。深山の中でひっそりと時を刻んできたものなどその生い立ちは様々です。このサイカチは、さしずめ空気のように人々の農の営みを静かに見守りながら長い年月を生きてきたのではないでしょうか。

（岡崎　靖）

今年7月の台風により
2本あった太い枝の1本
が折れてしまいました

涼しげな木陰は、カワトンボの
絶好の休憩ポイント

「西山の里　桃源」の西洋シャクナゲ

桃源庭園のあずまや近くに「アントン・ワン・ウォーリー」という西洋シャクナゲがあります。高さ5メートル、樹齢約50年だそうです。この木は、シクラメンの栽培をされている大内幸雄氏が13年前に桃源の理事をされていた時、「庭園にきれいな花を」との思いから寄贈されたものです。春に美しいピンクの花を咲かせています。桃源を訪れた方から「見事だね。」「シャクナゲってこんなに大きくなるんだ。」「こんなの初めて見た。」との声を多く聞くそうです。

（相原　早苗）

クリスト・アンブレラ展 ～青い傘が残したもの

いつも見ている風景が、青い傘ごしにみるだけで、くっきりとその美しさを際立たせたあの不思議な経験を、皆さんも覚えているでしょうか？クリスト・アンブレラ展から20年。たった一本の記念の傘も残っていないのに、私たちの記憶の中にしっかりと存在するふるさとの景色。思い出の品や写真と共に、あの風景の不思議をもう一度考えてみませんか？

雄姿とはとても言えず、高さ6メートルの柱に座り「絶景かな」と感じる余裕も全くなく、両手を広げてバランスを取るのが精一杯の自分が写っている。今から20年前、33歳の時だ。

写真を撮ったのは、アメリカでの事故を受けて、予定より2日早くアンブレラが閉じてしまった翌日の平成3年10月28日。家の前の畑に立っていたアンブレラに梯子を2つ繋いで登り、梯子を外してから家族にシャッターを押してもらった。最初は、立ち上がってから撮ってもらおうと考えていたが、柱の上はグラついていて立ち上がることができなかった。

アンブレラに登って写真を撮る計画は早いうちから持っていた。最終日にアンブレラの中から梯子を使って登るというものだった。最終日ならば、刃物を使って生地を切り裂いてその上に登っても、翌日は閉じてしまうのだから問題にはならないだろうと、勝手に考えていた。

里川沿いに立てられたブルーのアンブレラは全部で1,340本だったが、エリア内だった我が家の田畑には9本立てられた。土地借用代と作物補償料で1本1万5千円が支払われた。

記憶は薄れつつあるが、この写真を見ていると、著名な芸術家の作品を一目見ようと世界中から訪れた人や車で里川沿いが溢れかえった不思議な時間を思い出す。（大金　博紀）

青色の巨大な傘が、何百本も立ち並ぶ風景は、私には、驚きであった。ビデオ映像を作品にする趣味を持っていた私にとって、題材としては魅力的であった。パンフレットなどに載っている、スケッチ画の場所を探して撮り歩いた記憶がある。撮影した作品は好運にも賞を受賞した。

最初は、田畑が広がり、里川の豊かな流れの中に、不似合だと思っていたが、自然と溶け込んでいることに気がついた。玉簾の滝の境内に、青い色の傘が立っていても、違和感さえなく自然と溶け込んでいた記憶がある。町屋の地元の人が「うえんでえ（上の台の意味）」と、呼んでいる高台から見おろすと、田畑に立ち並ぶ傘の群れに圧倒された。クリスト・ヤバチェフという人物は、自然や、構造物に何を加えるべきかを良く知っており、ビデオカメラを向けた先には、当然のように正確に構成された映像が飛び込んできたものだった。まさに、計算しつくされた芸術美をそこに訪れた全ての人に、平等に鑑賞させてくれた、芸術であったと思う。（黒羽　文男）

広　告

クリスト・アンブレラ展思い出の品々

▲クリストさんご夫妻
おひろめ記念パーティーでのクリストご夫妻。手にしているのはプレゼントされた竹かご。職人さんが手づくりで編んだ竹かごよりも、中の水を入れる竹筒を「ビューティフル！」と気にいっていたそうです。

クリスト・アンブレラ展
記念テレホンカード

奥久慈の山ふところに抱かれた山紫水明の地、「里美村」は、茨城県の最北端にあり、首都東京から１５０km、県都水戸からは６０kmの地点に位置しています。地形的には、東西に約１０km、南北に約２４kmの細長い村で、中央を流れる里川の流域に沿って集落が点在し、その集落を囲むように田園の広がる緑豊かな山村です。

世界を代表する現代アーチストであるクリスト・ヤバチェフ氏は、この長閑な田園風景に日本の原点を見出し、壮大なスケールで展開される芸術祭「アンブレラ展」開催の地と決定しました。

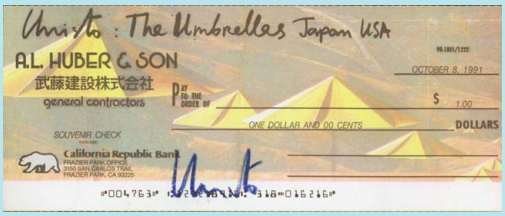
この「アンブレラ展」は日本とアメリカを結んで本年の１０月８日から１０月２９日までの２２日間開催され、高さ６m、直径８.７mの巨大な傘が約１９kmにわたって林立します。真っ青な傘の織りなす幻想的な空間に人々の営みが創造されます。

私たち村民は、「アンブレラ展」に全面的に協力し、国内外から訪れる多くの方々を暖かく迎え、里美村の素晴らしさを知っていただき、今後のむらづくりに多いに活かして行きたいと思っています。

〈このカードは〉
里美村の木「杉」でつくったものです。

里美村観光協会

◀テレホンカード
アメリカで展示されていた黄金の傘と常陸太田の青い傘セットで販売されていました。



Christo : The Umbrellas Japan USA
A.L. HUBER & SON
武藤建設株式会社
general contractors
OCTOBER 8, 1991
$ 1.00
ONE DOLLAR AND 00 CENTS
DOLLARS
SOUVENIR CHECK
California Republic Bank

◀傘の設置など、多くのボランティアの方が関わりました。そのお礼として配られた額面１ドルの小切手。クリストさんのサイン入りです。

◀ボランティアスタッフ用に配られたトレーナー。

フォンズ×資料館コラボレーション企画

「思い出の青い傘 ―クリスト・アンブレラ 回顧展―」出品者募集のお知らせ

クリスト・アンブレラ展から20年…今も人々の心に鮮やかに残る青い傘の数々にまつわる思い出の品々を、平成23年12月2日より常陸太田市郷土資料館にて展示します。つきましては、思い出の写真や品々などをご出品いただける方を募集いたします。詳しくは下記までお問合せください。

常陸太田市郷土資料館（TEL 0294－72－3201）常陸太田市西二町2186番地

リレーエッセイ「思い出の絵本」『おせちいっかのおしょうがつ』 ～57～

（大里町　水野　晃子）

昭和50年代、私が小学生の頃、毎年年末の大掃除が終わると、妹と３人でおせち料理作りの手伝いをするのが大好きでした。祖母と母は朝から晩まで台所に立ち通しです。玄関先には七輪が置かれ、その上には私たちが作った昆布巻が大鍋の中にきれいに並べられ、コトコトと静かな音を立てています。何とも言えない良い香りが家中に広がり、寒さなんて吹き飛んでしまいます。他にも、ごまめ、伊達巻、栗きんとん…次から次へとご馳走が作られ、試食する私にとって至福のひとときでした。

今では私も母となり、子どもにおせちを作る番になりました。しかし、手作りでとなると簡単ではありません。手作りのおせちのありがたさがよくわかりました。

「子どもにおせちを伝えたい！」そんな時に出会ったのが、この本です。新聞の紹介欄で見て、書店で取り寄せました。当時３才の娘は一目で気に入り、大好きになってくれました。だてまきママに、くわいパパ、えびばあちゃんと、たたきごぼうじいちゃん、ふたごのかまぼこちゃんを中心にしたおせち一家は、お正月の準備で大忙し。そして、おぞう煮一家やおすし一家も集まり出すのです。家族の優しさや温かさ、おせちの名前由来、お正月の過ごし方まで分かります。絵も可愛いので小さなお子さんも見やすいでしょう。

８才に成長した娘が、今も時々本をひっぱり出してきて読んでいる姿が、とても嬉しいです。今年はどんなおせちを作ろうか？　（次回は　幡町　根本 佳津見さん）

百姓母ちゃん農日記 ❷ もんぺ便り

『そうよ私は台所奉行』

ある料理研究家は台所をあずかる人のことを台所奉行と呼んでいる。ともすれば台所仕事は地味で下働き的なイメージもあるが、お奉行様といわれると、「どうだ、まいったか」と両手を腰に当てたくなるような自尊心をくすぐられる。農作業と家事の合間をぬって、決まった時間に三度の飯を作るのは、たやすいことではない。でも、家庭の中心は台所にあると思う。その家庭がどんな暮らしぶりをし、何を大切に思っているか、その家の経済・健康・文化は結構台所を中心に動いている。なんといっても食べることは生きることなのだから。

そして、農家の私にとっては台所仕事も、農作業の一部。簡単なご飯でも、家族でニコニコ食べられるコツ、農作物の加工保存の仕事のほか、生ごみを鶏にあげたり、土に返したり、畑と家をつなぐ仕事。台所仕事はただのまかない仕事ではない奥深さを持っていると感じる。面倒くさく泥くさいけれど、素敵な仕事だ。

最近は泥ものでキッチンが汚れるのが嫌だから、泥つき野菜を買わない人も多いと聞く。食を商品として買う側に立てば、そんな選択肢も可能だが、一度泥つき野菜のおいしさを味わったら、少し選択の幅も広がるのではと思う。たとえば、これから旬の里いも。スーパーで皮をきれいに剥いてあるものもあるけれど、掘りたての里いもは、バケツに入れて芋洗い棒という松の木で作ったものでゴシゴシよく洗う。そうするときれいに泥はおちて、あとは少し皮をむくだけできれいな白い肌をだしてくれる。それを蒸したり、煮たりして食べることのおいしいこと！畑と台所が直結していればいるほど、私たちはおいしいものが食べられる。それはこれまで農家をやってきて実感するところだ。

そんなこんなで台所奉行を仰せつかってはや10年。農家の台所に立って、自分を見つめ、家族を見つめ、自然の産物に囲まれながら、今日もご飯を作る。

（布施　美樹）

子育て奮闘記 踊るママパラダイス ㊻

夏休み、寮生活を送っていた長女のスミレが帰省していました。４月、まだ震災のショックから立ち直れない時期に彼女を送り出した私は、一ヶ月の休みの間一緒に過ごせる嬉しさをかみしめていました。

卒業後は、そのまま附属の病院に就職することになっており、その地で縁があれば常陸太田に帰ることはないと覚悟して家を出しました。

高校を卒業するまで、自分の事もろくにやらなかったスミレに炊事、洗濯、掃除、金銭管理の一つも満足に教えずに送り出してしまったことが、私の心配事でありました。一人で食べるのに五合もお米を炊いてしまったとか、洗濯の柔軟剤はいつ入れればいいかわからず、全自動の洗濯機の前でずっと待っていたと言う話をされるたび、そばにいるうちもっと教えておけば良かったと後悔しました。

そんな感じでスタートしたスミレの生活ですが、時々見に行くと部屋もきれいに掃除してあり、食事もきちんと作り洗濯もためることなく、無駄遣いもせず、ちゃんとできている様子をかいま見ることができました。

学校のレポートが手書きで大変そうなので、安いパソコンを買ってあげようかと言ったときのこと。スミレは静かにこう言いました。「私の同級生の中には東北から来ている子がたくさんいて家が流されたり、母子家庭になった子がいる。私は満足な生活をしているからいらないよ。」

この先は私が教えるばかりではなくスミレが自分で覚えていくのだと思い知らされた言葉でした。

安心と少しの寂しさを感じつつ、私の生活はこの先ずっと続くのでしょう。そのうち自分が年老いていく心配をしなくてはなりませんが、まだまだ下の子の心配もしなければなりません。私の母が、亡くなる直前まで私の心配をしてくれたのを思い出しました。

―― わいわいネット　織田　裕子 ――

欲ばりました